

「世親作」の論書について

——『頌義集 (*Gāthārthasamgraha)』研究——

堀内俊郎

はじめに

チベット大蔵経には漢訳大蔵経と同じく、世親 (Vasubandhu) に帰せられる文献が数多く存し⁽¹⁾、その中にはサンスクリット、漢訳ともに逸し、チベット訳にのみ残存するものもいくつかある。しかし、それらの大半は、残念ながら詳細な研究を欠く状況にある。

世親の著作リストは、先学によって、順に、『俱舍論 (AkBh)』『釈軌論 (VyY)』『成業論』『縁起経釈』『二十論』『三十頌』であると論定されている (松田 1984)。ただ、それ以外にも多数存する「世親作」の論書をどう位置付けるかは今後の検討課題といえる。すなわち、それらを世親作でないとするか、あるいは世親作としてリストに含めるか、いずれにせよ積極的な検討が必要であろう。

その中、本稿ではチベット大蔵経にのみ残され、世親作とされている『頌義集 (*Gāthārthasamgraha, GAS)』を取りあげ、そのいくつかの特色と著者問題について考察する。

1 先行研究

まず、本節では本論ならびにそれに関連する文献の情報と、先行研究について紹介する。『頌集 (*Gāthāsamgraha, GS)』は、主にウダーナヴァルガ (UV) から 21 の頌を集めたものであり、『頌義集』は、それに対する注釈である。さらに、『頌集』の最初の頌は、注釈と共に『一頌疏』 (*Ekagāthābhāṣya*) として独立の著作として扱われている。また、陳那の注釈がある (*Ekagāthāṭīkā*, P No.2063)。

本論は『ブトン仏教史』では、「小乗の論書 (theg chung gi bstan bcos)」という項目下に分類されている。

[480] 世親先生によって作られた『頌集』本文 [481]。[その]『注釈』、Jñānagarbha とペルツェックの翻訳である⁽²⁾。

その数個後には、[486]『俱舍論頌 (AK)』、[487]『俱舍論』など、『俱舍論』とその注釈が列挙されており、それらと共に小乗の論書として分類されていることが伺える。

先行研究としては、Schieffner (1878) が、『頌義集』の一部を翻訳している。W.Woodville Rockhill (1883) は、UV の翻訳紹介であるが、その付録として、『頌集』の英訳をしている。また、榎本 (1985) は『頌集』について、UV からの出典箇所を指摘している。近年本

論について本格的に取りあげ、世親作として位置付けたのは Skilling (2000) である。以下にその所論を要約する。

『頌義集』は、その名を出さずに『俱舍論』を引用しており、『百節經』と同じ經文を引用し、『釈軌論』や『緣起經釈』と同じ、数個の文章を含んでいる。『頌義集』は「特徴的な大乘的概念を含まない does not...or contain any uniquely Mahāyāna ideas」が、無着 (Asaṅga) の『アビダルマ集論 (AS)』を主要な素材としている。本論については完全な研究が出るまでは、暫定的に『釈軌論』よりも前の著作とする。ともかく、『俱舍論』に多く依存しているので、「古世親」のものではない。

以上が Skilling (2000) によって指摘されたことであるが、ただ、本論が果たして世親作であるかどうかについては再考の余地がある。そこで以下にその問題に焦点を絞り、本論の特徴をよく示すと思われる第 10 番目の頌、第 19 番目の頌（それぞれ頌 (10)、頌 (19) と表記する）という二つの頌に対する解釈（それぞれ『頌義集』(10)、(11) と表記する）を検討する。

2 『頌義集』(10)

本論の構成、組み立ての特徴を示すために、以下に頌 (10) に対する『頌義集』の注釈を挙げる。（本箇所には Schiefner (1878) による独訳がある。また、本箇所は長いため、適宜省略し、その骨格だけを示す）

『頌義集』(10)：「聞くことによって教法が知られる。聞くことによって悪が退けられる。聞くことによって不利益が断じられる。聞くことによって涅槃が得られる」⁽³⁾と、ある頌である。

(問い) 世尊によってこれがなぜ説かれたのか。

【解釈一】正見が生じるためと、三学によって悪と欲と後有 (*punarbhava) から超越させるためである。(pāda a に対する注釈 (a) は省略) (b) 「聞くことによって悪が退けられる」とはつまり、「ここである人々が、如来によって説かれた教法と調伏から増上戒学を聞いて、それによって、身体と口と意の悪行から退く」。「退く」とは退きである。「悪」とは悪行 (*duṣcarita) である十不善業道である。身体にとっては三つ（すなわち）(i) 殺生、(ii) 偷盜、(iii) 邪淫である。口にとっては四つ（すなわち）(iv) 妄語、(v) 兩舌、(vi) 惡口、(vii) 綺語である。意にとっては三つ（すなわち）(viii) 貪欲、(ix) 瞋恚、(x) 邪見である。それらの設定は (1) 基盤、(2) 意向、(3) 準備行、(4) 煩惱、(5) 完成からも知られるべきである。(中略) (i) そのなか、殺生の (1) 基盤は諸の衆生である。(2) 意向は、それ（衆生）に対してそれとして表象した害する意向である。(3) 準備行は、殺すためにたたき切るなどである。つまり、ある人が畜生を殺そうと思ってイスから立ち上がり、金を取り、行き、触れ、動物を買い、連れて来る。養い、入らせ、殺すために武器を取り、一回あるいは二回たたき切る時に、いまだ生命を奪わない、そのかぎりが準備行である。(4) 煩惱は、貪、瞋、痴である。つまり貪に

——「世親作」の論書について——

よる殺生は、肉などを欲するものたちにとってである。たとえば身体の支分のため、財物のため、遊びのために、命あるものたちを命と離れさせることのようなものと、あるいは、自己の友人を救うためのものである。(以下、偷盗から邪見の説明は省略) そのように、それら十不善業道と離れることが、「退く」である。さらに、業道の意味は何か。(業道の説明は省略。続く pāda c、d に対する (c) (d) も省略)

要約された意味は、この頌によって、正見を獲得することと、三学によって悪を超越することと、欲を超越することと、後有を超越することが説かれた。

【解釈二】あるいはまた、説示に入る原因と、業雑染、煩惱雑染、生雑染を超越することが説かれた。(以下省略)⁽⁴⁾

ここで、考察の結果を先取りすれば、『頌義集』のこの箇所は、『俱舍論』『釈軌論』『集論』『雜集論』に対応箇所が見いだされる。以下に『頌義集』がそれらの論書をどのように取り込んでいるかについて指摘する。

まず、この箇所の全体の枠組みは、この頌が説かれた目的を二通りに解釈し、その第一の解釈で、当該の頌を四句に区切り、それぞれについて「ここである人々が」で始まる節をもって説明するというものであるが、それは『釈軌論』に対応箇所が見いだされる。

『釈軌論』：さらになぜか。世尊によって、「聞くことにより教法が知られる。聞くことにより不信が退く。聞くことにより不利益は捨てられる。聞くことにより涅槃を得る」と説かれているからである。

【解釈一】(pāda a に対する注釈 (a) は省略) (b) どのようにして「聞くことによって悪が退く」のか。すなわち、ここである人々が、世尊によって説かれた教法と調伏から、増上戒学 (*adhiśīla) を聞くならば、それによって悪行 (*duṣcarita) から離れる。(c) どのようにして「聞くことによって不利益が断じられる」のか。すなわち、ここである人々が、世尊によって説かれた教法と調伏から、増上心学 (*adhicitta) を聞くならば、それによって凡夫たちが利益があると表象している、不利益となる諸の欲が断じられる。(pāda d の注釈 (d) は省略)

こ[の頌]によって、正法 (*saddharma) を聞くことに四種の利益、すなわち正見を得ること、三学に依ることによって悪を乗り越えること、欲を乗り越えること、再生を乗り越えることが、順に説かれている。

【解釈二】また、煩惱を害するという原因により四種の利益、すなわち正見を得ること、業雑染を乗り越えること、煩惱雑染を乗り越えること、生雑染を乗り越えることがあると説かれた⁽⁵⁾。

次に、『頌義集』は、pāda b (第二句) の説明 (b) の後に、頌のなかの「悪」とは十不善業道を指すとし、十不善業道の説明をしているが、『釈軌論』はすぐに pāda c の説明に移っているので、これは『頌義集』独自のものである。頌に対する注釈という点からは、『頌義集』よりも『釈軌論』のほうが整っているといえる⁽⁶⁾。その『頌義集』の十不善業道解釈は、『集論』に基づいている。(『集論』：殺生などの特徴は、(1) 基盤、(2) 意向、(3) 準備行、

(4) 煩惱、(5) 完成からも、知られるべきである⁽⁷⁾。)

十不善業道の個々の項目の説明は、基本的に『雑集論』を引用している。、『雑集論』：(i) そのなか、殺生の(1) 基盤は衆生である。(2) 意向は、それ(衆生)に対してそれとして表象する人の、害する意向である。(3) 準備行は、武器などによって打つことである。(4) 煩惱は、貪などである。(5) 完成は、かの命あるものがその準備行によって、その直後もしくは後に死ぬことである⁽⁸⁾。)

『頌義集』の(3) 準備行の項目は、『雑集論』からではなく『俱舍論』からの引用である⁽⁹⁾。

また、『雑集論』では、「(4) 煩惱」につき、「煩惱は貪などである」とだけ説明していたが、『頌義集』は、「煩惱は、貪、瞋、痴である」としている。これは、それ以下の貪より生じた殺生、瞋より生じた殺生、痴より生じた殺生の説明を導入しやすくするために、『雑集論』に手を加えたものであると考えられる。そしてその説明は、『俱舍論』に依っている。、『俱舍論』：そのなか、貪より生じた「殺生」は、たとえば身体の支分のため、財物のため、遊びのために、命あるものたちを命と離れさせることのようなものと、あるいは、自己の友人を救うためのものである⁽¹⁰⁾。)

以下(ii) 偷盜から(ix) 瞋恚までの十不善業道の説明は殺生とほぼ同様の構成となっており、基本的に『雑集論』の説明を引用している。ただし「(4) 煩惱」の説明を「貪より生じた殺生は」などと、『俱舍論』を引用して説明しているのは(i) 殺生から(iv) 妄語までである。これは引用元である『俱舍論』が(v) 両舌以下の項目についてそのような説明をしていないからである。

また、『頌義集』は十不善業道の最後の項目である(x) 邪見については、『集論』⁽¹¹⁾『雑集論』⁽¹²⁾の別の箇所を引用し、説明に充てている。

さらに『頌義集』では「業道」とは何かが論じられているが、この語は本来の注釈対象である頌ではなく、(b) の冒頭で頌(10)の pāda b に出る「悪」を十不善業道のことであるとしたので、それに関連して業道の説明をしているのである。そしてそれは『俱舍論』からの引用である⁽¹³⁾。

この後もさらに『頌義集』の説明は続き、『釈軌論』に対応箇所が見いだされるのであるが、省く。

以上、『頌義集』(10)の出典、対応箇所とその異同について、一部を取りあげ検討した。これによって見る限り、本論は様々な論書から自在に説明を取り込んでいるという特徴が見て取れる。また、ここで『頌義集』の著者問題と関連して注意したいことは、『頌義集』は『集論』のみならず、『雑集論』をも引用しているという点である。従って『頌義集』は少なくとも『雑集論』よりは後である。

3 『頌義集』(19)

次に、『頌義集』の思想的特徴の一端を示すものとして、頌(19)(出典はUV, I.3)に対する解釈の一部を取りあげる。

『頌義集』(19):「それらの静まったことは安樂である」とは結生(*pratisamḍhi)のない滅、すなわち涅槃である。その設定はまた、十三の様相によって知られるべきである。すなわち、(i) 相、(ii) 甚深、(iii) 雜染、(iv) 勝義、(v) 不円満、(vi) 円満、(vii) 無莊嚴、(viii) 有莊嚴、(ix) 無殊勝、(x) 有殊勝、(xi) 有余、(xii) 無余、(xiii) 異門によってである⁽¹⁴⁾。

『頌義集』(19)は、頌の pāda d (第四句)を「涅槃」のことを指していると理解し、その涅槃を13の様相を持つものとして解釈する。同様の解釈は、個々の項目について多少の異なりはあるものの『集論』にも見られ、『頌義集』の涅槃に対するこの解釈は、『集論』に依拠している。([集論]:滅諦とは何か。(i) 相、(ii) 甚深、(iii) 協約 (brda, *samketa、社会的協約)、(iv) 勝義、(v) 不円満、(vi) 円満、(vii) 無莊嚴、(viii) 有莊嚴、(ix) 有余、(x) 無余、(xi) 最勝、(xii) 異門から、滅諦が知られるべきである⁽¹⁵⁾。)

ここで項目として立てられているのは12個であるが、当該箇所に関する研究である吉元(1985)が指摘するように、『集論』はこの少し後の箇所、(xiii) (行) 相 (滅・静・妙・離)という観点からも、涅槃の説明をしている。

両論のそれぞれの項目に対する解釈は少なからず異なっており、『頌義集』は『集論』に多分に依存しながらもなお独自の解釈を展開しているのであるが、本稿の目的との関連で、以下の箇所のみを比較検討する。

『集論』: (x) 無余によってどのようにか。無余依滅である。(xi) 殊勝によってどのようにか。仏、世尊にとっての、不住涅槃に含まれる滅である。なぜなら一切衆生の利益と安樂に住するので⁽¹⁶⁾。

『頌義集』(19): (ix) 無殊勝によっては、煩惱障から解き放たれた声聞と独覚たちである。(x) 有殊勝によっては、正等覚である。所知障から解き放たれているので⁽¹⁷⁾。

項目が厳密に対応しないが、ここでの『頌義集』の記述は、『集論』にはその前後にも対応箇所が見あらず、『頌義集』独自の説明であり、煩惱障、所知障という概念を用いて声聞・独覚と正等覚を区別している点が注目される。そしてこれは瑜伽行派においてしばしば行われる解釈である。

4 結論

本稿では、『頌義集』の中、特徴的な二例につき、出典調査ならびに出典との比較検討を行った。この検討によって、本論の特色について少なくとも以下の結論が得られた。

『頌義集』(10)は、『俱舍論』『釈軌論』『集論』ならびに『雜集論』に依っている。ただし単なる引用の羅列ではなく、基本的な枠組みは『釈軌論』に依りながらも、その中に自在に諸論書からの説明を挿入しているという点で、特徴のある注釈となっている。『頌義集』は、『雜集論』よりは後であり、本論が世親の著作であるかどうかという問題は、『雜集論』と世

——「世親作」の論書について——

親との先後関係の解明を待つこととなる。ただ、世親の著作にこれほど明確な形で『集論』、『雑集論』からの引用があるという例は報告されておらず、『頌義集』は世親作でない可能性が高い。

『頌義集』(19)には煩悩障、所知障を断じているか否かによって声聞・独覺と、正等覺を区別するという記述があるので、大乘的概念が顕れていないとはいえない。

略号表

- AKBh Vasubandhu. *Abhidharmakośabhāṣya*. In *Abhidharmakośabhāṣya of Vasubandhu*. Ed. P. Pradhan. (Tibetan Sanskrit Works Series 8). Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1967.
- AS Asaṅga. *Abhidharmasamuccaya*. P No.5550, D No.4049.
- ASBh *Abhidharmasamuccaya-bhāṣya*. In *Abhidharmasamuccaya-bhāṣyam*. Ed. N. Tatia. (Tibetan Sanskrit Works Series 17). Patna: K. P. Jayaswal Research Institute, 1976.
- C Tibetan Tripiṭaka, Co ne edition.
- D Tibetan Tripiṭaka, sDe dge edition.
- GS **Gāthāsaṃgraha*. P No.5603, D No.4102.
- GAS **Gāthārthasaṃgraha*. P No.5604, D No.4103.
- N Tibetan Tripiṭaka, sNar thang edition.
- P Tibetan Tripiṭaka, Peking edition.
- UV *Udānavarga*. In *Udānavarga*. Ed. F. Bernhard. (Sanskrittexte aus den Turfanfunden X. Band I). Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1965.
- VyY Vasubandhu. *Vyākhyāyukti*. P No.5562, D No.4061. (Lee, Jong Choel. *The Tibetan Text of the Vyākhyāyukti of Vasubandhu*. (Bibliotheca Indologica et Buddhologica 8). Tokyo: The Sankibo Press, 2001.)

文献表

Chattopadhyaya, A.

- 1970 *Tāranātha's History of Buddhism in India*. (repr.Delhi: Motilal Banarasidass, 1990.)

Schiefner, A.

- 1878 *Über Vasubandhu's Gāthāsaṃgraha*, Mélanges asiatiques VIII.Bulletin t. XXV, St.Petersburg. pp.559–593.

——「世親作」の論書について——

Skilling, P.

- 2000 "Vasubandhu and the *Vyākhyāyukti* Literature." *Journal of the International Association of Buddhist Studies*. 23-2, pp.297-350.

Woodville Rockhill, W.

- 1883 *Udānavarga: A Collection of Verses from the Buddhist Canon*. London. pp.213-216.

榎本文雄

- 1985 「『雑阿含経』関係の梵文写本断片——『Turfan 出土梵文写本目録』 第五巻をめぐって——」『佛教研究』15、pp.81-93。

西岡祖秀

- 1981 「『プトゥン仏教史』目録部索引 II」『東京大学文学部文化交流研究施設研究紀要』5、pp.43-94。

松田和信

- 1984 「Vasubandhu 研究ノート (1)」『印仏研』32-2、pp. (82) - (85)。

吉元信行

- 1985 「滅諦の大乘アビダルマ的分析」『印仏研』34-1、pp. (102) - (107)。

注

- (1) Chattopadhyaya (1970, 395-397) 参照。
- (2) [480] slob dpon dByig gnyen gyis mdzad pa'i Tshigs su bcad pa bsdus pa rtsa [481] 'grel Ye shes snying po dang dPal brtsegs kyi 'gyur / 西岡 (1981, 48); *The collected works of Bu-ston*, part 34 (YA), Ed. Lokesh Candra. (Śāṭa-piṭaka Series vol.64). New Delhi, 1971, 155b4-5.
- (3) UV, XXII.6 (p.286) : śrutvā dharmām vijānāti śrutvā pāpaṃ na sevate / śrutvā hy anartham varjayate śrutvā prāpnoti nirvṛtim // UV では、pāda b の後半は na sevate (仕えない) となっており、『頌義集』の log par byed には対応しない。『頌義集』のサンスクリット原文には nivartate とでもあったのであろうか。『釈軌論』では ldog par byed とある。(注 5 参照)
- (4) GAS, P257a6-260b4, D237b3-240a6: thos pas chos kyi bye brag shes // thos pas sdig las ldog par byed // thos pas don ma yin pa spong // thos pas mya ngan 'das pa thob // ces tshigs su bcad pa'o // bcom ldan 'das kyis 'di ci'i phyir gsungs she na / yang dag pa'i lta ba skyed pa'i phyir dang / bslab pa gsum la brten te sdig pa dang / 'dod pa dang / yang srid pa las yang dag par 'da' par (C 236b) bya ba'i phyir ro // (...) thos pas sdig las ldog par byed pa ni 'di skad du 'di na la la de bzhin gshegs pas chos 'dul ba

—「世親作」の論書について—

gsungs pa las lhag pa'i tshul khriṃs kyi (PN: kyis) bslab pa thos nas de la brten te /
 lus dang ngag dang yid kyi spyod pa ngan pa las ldog ste / log par byed pa ni ldog pa'o
 // sdig pa ni nyes par spyad (PN: sbyad) pa'i mi dge ba bcu'i las kyi lam ste / lus kyi
 gsum po srog gcod pa dang / ma byin par len pa dang / 'dod pas log par g-yem pa dang
 / (D 238a) ngag gi bzhi po brdzun du smra ba dang / phra ma dang / tshig rtsub po
 dang / ngag 'khyal ba dang / yid kyi gsum po brnab (PN: bsṇab) sems dang / gnod
 sems dang / log (N: leg) par lta ba'o // de dag gi (N 263b) rnam par bzhag (DC: gzḥag)
 pa ni gzhi (PN: bzhi) dang / bsam pa dang / sbyor ba dang / nyon mongs pa dang /
 mthar phyin pa las kyang rig par bya ste / (...) de la srog gcod pa'i gzhi ni sems can
 rnams so // bsam pa ni de la der (P 258a) 'du shes pa'i gsod pa'i bsam pa'o // sbyor
 ba ni bsad (DC: gsad) pa'i phyir 'debs pa la sogs pa ste / 'di ltar phyugs gcod (DC:
 gsod) par 'dod pa kha cig stan las ldang / rin len / 'gro bar byed / phyugs la (PN: om
 la) nom par byed / (C 237a) nyo bar byed / khrid de 'ong bar byed / gso bar byed /
 khyim du 'jug par byed / (PN: om gso bar byed / khyim du 'jug par byed /) gnod par
 byed / mtshon len par byed pa / mtshon lan (C: len) gcig (PN: cig) lan gnyis 'debs
 pa las (PN: nas) / ji srid du srog dang bral bar byed pa de srid du sbyor ba'o // nyon
 mongs pa ni chags pa dang / zhe sdang dang / gti mug rnams te (DC: dang) / chags
 pas srog gcod pa ni sha la sogs pa 'dod pa rnams kyi ste / dper na lus kyi yan lag gi
 don dang / nor gyi don dang / rtsed mo'i don du srog chags rnams srog dang bral bar
 (D: par) byed pa lta bu dang / yang na bdag gi snying du sdug pa bskyab pa'i phyir
 yin no // (...) de ltar mi dge ba (P: pa) bcu'i las kyi lam de dag dang bral ba ni log
 par byed pa'o // yang las kyi lam zhes bya ba'i don ci zhe na / (...) de ltar las kyi lam
 dang las kyang yin la las kyi lam yang yin pas las kyi lam rnams so // (...) bsdus pa'i
 don ni tshigs su bcad pa 'dis yang dag pa'i lta ba rnyed pa dang bslab pa gsum la brten
 te sdig pa las yang dag par 'das pa dang / 'dod pa las yang dag par 'das pa dang / yang
 (PDNC: om. yang) srid pa las yang dag par 'das pa (PN: ins dang) bstan to // rnam
 pa gcig tu na bstan pa la 'jug pa'i rgyu dang / las dang nyon mongs pa dang / tshe'i
 kun nas nyon mongs pa las yang dag par 'das pa bstan to // ((...) は中略を示す)

- (5) VyY, P136b3-137a5, D117a7-118a1. Lee, 258-260.
- (6) これら五つの観点から十不善業道を説明するのは『集論』によっているのであり、『俱舍論』
 にではない。『俱舍論』は加行、根本、後得の三つの枠組みで十不善業道を設定する (AKBh,
 239.11-14)
- (7) AS, P101b2-3, D85b2-3: srog gcod pa la sogs pa rnams kyi mtshan nyid ni gzhi dang /
 bsam pa dang / sbyor ba dang / nyon mongs pa dang / zin par byas pas kyang rig par
 bya'o //
- (8) ASBh, 19-22.
- (9) AKBh, 239.11-14.
- (10) AKBh, 240.19-20.
- (11) AKBh, 248.1-6.
- (12) AS, 16.31-33.
- (13) ASBh, 6.6-13.
- (14) GAS, P281a5-8, D256b7-257b2: de dag rnam par zhi ba bde zhes bya ba ni (D 257b)
 nying mtshams (PN: mtshan) sbyor ba med pa'i 'gog pa ste / mya ngan las 'das pa'o

——「世親作」の論書について——

- // de'i rnam par bzhag (DC: gzhaḡ) pa yang rnam pa bcu gsum gyis rig par bya ste /
 mtshan nyid dang / zab pa dang / kun nas nyon mongs pa dang / don dam pa dang
 / yongs su ma rdzogs (PN: rtogs) pa dang / yongs su rdzogs pa dang / rgyan med pa
 dang / rgyan dang bcas pa dang / khyad par med pa dang / khyad par du 'phags pa
 dang / lhag ma dang bcas pa dang / lhag ma med pa dang / rnam grangs kyis so //
- (15) AS, P107b4-6, D90b2-4: 'gog pa'i bden pa gang zhe na / mtshan nyid dang / zab pa
 dang / brda dang / don tam pa dang / yongs su ma rdzogs pa dang / yongs su rdzogs
 pa dang / rgyan med pa dang / rgyan dang bcas pa dang / lhag ma dang bcas pa dang
 / lhag ma med pa dang / khyad par du 'phags pa dang / rnam grangs kyis kyang 'gog
 pa'i bden pa (D: par) rig par bya'o //
- (16) AS, P108b4-5, D91a7-91b1: lhag ma med pas ji lta bu zhe na / phung po'i lhag ma med
 pa'i 'gog pa gang yin pa'o // khyad par du 'phags pas ji lta bu zhe na / sangs rgyas dang
 byang chub sems dpa' rnam kyis mi gnas pa'i mya ngan las 'das par bsdus pa'i 'gog pa
 gang yin pa ste / sems can thams cad (D 91b) la phan pa dang bde ba nye bar (D: ba
 nye bar, P: bar) gnas pa'i phyir ro //
- (17) GAS, P281a3-4, D258a4: khyad par med* pas ni nyom mongs pa'i sgrib pa las rnam par
 grol ba / nyan thos dang / rang sangs rgyas dag go // khyad par du 'phags pas ni yang
 dag par rdzogs pa'i sangs rgyas shes bya'i sgrib pa las rnam par grol bas so // (*PDNC:
 khyad par yod pa (殊勝) だが、冒頭に列挙されていた無殊勝を採る)